

そのまま使える医療英会話 [CD 付]

仁木久恵, 森島祐子, Flaminia Miyamasu 著

＜書評者＞ 曾根博仁 (筑波大学大学院教授・内分泌代謝・
糖尿病内科)

いうまでもなく、英語はすでに医療の世界にも深く入り込んでおり、われわれは日本にいても、日常的に英語の教科書を読んだり、英語の論文からエビデンスを抽出したり、時には国際学会で英語の発表をしたり、英語論文を書いたりもしている。最近では多くの若い医師や医療従事者が、このような英語による読み書きやフォーマルなプレゼンテーションをうまくできるようになってきた。医学英語教育の充実や、留学経験者の増加も寄与しているのだろう。しかし、このような書き言葉をベースにした医学英語に精通していても、外国人の患者さんが来るとけっこう苦勞する、というのが私自身を含む多くの医療従事者にとって正直なところではないか。英語圏であれば、子どもでも知っているような症状を表す言葉がすぐに出てこなくて、もどかしい思いをすることが多い。難しい専門用語が通じにくいのは日本人患者さんでも同じであるが、簡単な表現への言い換えは英語では実際にはなかなか難しい。

多くの若い医師が研究目的で留学するが、そのような人が英語によるコミュニケーションで困るの

は、専門用語を駆使した仕事上の会話でなく、むしろ研究室内の世間話や、銀行やスーパーマーケットなどでの日常会話である。診察室における患者さんとの会話もそのような日常会話の延長線上にあり、いくら英語の論文を native speaker と同じように読み書きできても、それだけでうまく英語による診療をこなせるわけではない。海外での診療経験を持たない大部分の医療従事者にとって、英語による診療のトレーニングあるいは診療現場での参照に最適なのが本書である。本書には、医師のみならず、看護師、技師、医療事務担当者など医療関係者の多くがそのまま使える便利な表現がコンパクトにまとめられている。付属の CD も、手近に native speaker の教師のいない環境では便利な学習ツールである。

本書をみると、診察室英語は決して特殊で難しいものではなく、むしろ高校までの英単語に必要な最低限の医学英語を加えていけばよいことがわかる。本書をめくると、われわれが英語の教科書や論文を理解するために、ラテン語やギリシャ語由来の難しい「医学専門用語」や論文表記に特有な「科学英

語」ばかり暗記しているうちに、実はそういう簡単な表現（医療英会話とでも言おうか）を忘れてしまっていることに気付く。

「医学英語」とはまったく異なる「医療英会話」の教育も現場では少しずつ導入されており、筑波大学でも今年度から医療面接のロールプレイを含めた授業が始まっていて大好評であると聞く。筆者らの時代には考えられなかっただけに、うらやましい限りである。今後は日本医療の国際化に対応するために、栄養指導や服薬指導なども含めて多くの医療従事者の養成に必要な科目になるであろう。

本書は、同著者によるさらに詳しい姉妹書『そのまま使える病院英語表現 5000』とともに、各外来ブースや病棟に 1 冊ずつ備え付けられているべき本である。『そのまま使える医療英会話 [CD 付]』で基本となる表現をできるだけ暗記しておき、備え付けられた『そのまま使える病院英語表現 5000』を必要に応じて辞書的に使えば、多くの診療場面は対応可能であると思われる。今までは緊張して冷や汗をかきながら診察していた外国人の患者さんを迎えるのが少し楽しみに変わる 1 冊である。

●A5 頁 128 2010 年
定価 3,675 円
(本体 3,500 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-00878-5]
医学書院 刊